

障制度」と「最低賃金基準を調整することにあたって、考慮すべき要素」を規定した。確かに、法律による基本的な保障がされているが、人間の欲望という側面があって、具体的な企業組織で働いている従業員はもらっている賃金に満足しているかどうかは別次元の問題である。各年齢層の精神面における満足感の相対的に高い。しかし、10代の若年者の中で満足しているのは約45%であるが、20代以降の人は24%前後に留まっている。作業環境において若年者の満足感が相対的に高いが、40代以降の中老年の満足感が低い。一つの解釈は過去の大鍋飯時代に人々の欲望は抑圧されたものであったが、経済の改革開放は人々の生活レベルを高めつつあることによって、人々の物質的な生活に対する欲望も拡大したのではないかと考えられる。

次に、このことが学歴別にどのように反映しているかについて見てみよう。調査の結果は表6～表10に示している。まず物質面に象徴されている「仕事の内容や能力にふさわしい賃金が支払われている」や「職場の作業環境（安全度・音響）が十分に整っている」に対して、全体的には高学歴層（専科短期大学以上）は低学歴層（高校以下）

より満足感が相対的に低い。しかし、精神面に象徴されている「世の中のためになる仕事につくことができた」、「自分の仕事は単調でない」に対して、高学歴層と低学歴層との満足感が分かれている。「世の中のためになる仕事につくことができた」に対して、低学歴層は比較的高い誇りを持っている。これに比べて、高学歴層はやや低い。「自分の仕事は単調でない」に対して、高学歴層の満足感は低学歴層より高い。仕事内容において、一般的に低学歴層は単純作業の仕事が多いことと、高学歴層は管理職あるいは技術職の仕事が多いことが考えられる。また、表11に示しているように10代から50代まで低学歴の人が半数以上を占めている。全体の教育水準の低さを表している。社会化という視点から社会成員は、一つの組織文化あるいは企業文化に適應していくために、一定の文化水準を保つために絶えず学習してゆく必要がある。企業従業員の文化水準の低さは長期的に見ても、非常に不利な一面である。したがって、この調査結果に表しているように、物質面の不満足感と精神面の相対的満足感との矛盾が存在している。

表6 学歴×仕事の内容や能力にふさわしい賃金が支払われている

	Count Row Pct Col Pct Tot Pct	そう思う	どちらも 言えない	そう思わ ない	Row Total
		1	2	3	
不識字	1		1 50.0	1 50.0	2 .2
小学校	2	3 21.4	3 21.4	8 57.1	14 1.1
中学校	3	116 30.7	154 40.7	108 28.6	378 30.0
高校	4	94 26.0	149 41.2	119 32.9	362 28.7
職業または専門学	5	31 22.6	61 44.5	45 32.8	137 10.9
専科短期大学	6	24 18.6	64 49.6	41 31.8	129 10.2
四年制大学以上	7	46 19.3	86 36.1	106 44.5	238 18.9
	Column Total	314 24.9	518 41.1	428 34.0	1260 100.0

(p < .00246 Missing=41)

表7 学歴×職場の作業環境(安全度・音響)が十分に整っている

	Count Row Pct Col Pct Tot Pct	そう思う	どちらも 言えない	そう思わ ない	Row Total
		1	2	3	
不識字	1		1 50.0	1 50.0	2 .2
小学校	2	7 50.0	2 14.3	5 35.7	14 1.1
中学校	3	232 61.5	102 27.1	43 11.4	377 30.2
高校	4	206 57.2	102 28.3	52 14.4	360 28.8
職業または専門学	5	62 45.3	50 36.5	25 18.2	137 11.0
専科短期大学	6	48 37.2	49 38.0	32 24.8	129 10.3
四年制大学以上	7	82 35.5	76 32.9	73 31.6	231 18.5
	Column Total	637 51.0	382 30.6	231 18.5	1250 100.0

(p < .00000 Missing=51)